

近現代の文学的文章の読み方を応用した古典の授業研究

ー『枕草子』の「語り手」に着目してー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 池田穂高

1. 研究の背景

(1)自身の経験

今年度、古典の授業の研究を進めるにあたって、高校時代に受けた古典の授業がどのようなものであったか振り返ってみた。すると、文法の知識を習得し、品詞分解を行い、教師から現代語訳を教わるというパターンの授業が多かったことを思い出した。受験対策をしなくてはならないということもあるのだろうが、暗記することが多く、そのことが原因で古典が嫌いと言っていた友人も多くいた。また、今年度、実習校では、新科目である「古典探究」の授業を中心に観察をしたが、その実習校の先生から、本来ならば古典の授業で、もっと内容に関する問いなどを取り入れたいが、そのような問いを考えるためには文法などの知識は不可欠であるし、模擬試験や大学受験のことを考えるとどうしても文法に力を入れざるを得ない、という葛藤を聞くこともあった。もしかしたら、自分の高校時代の先生も同じ悩みを抱えていたのかもしれない。

(2)古典嫌いにに関する調査

先述したことについて、日本学術会議が出した『高校国語教育の改善に向けて』の中で以下のように述べられている。

平成 14 (2002) 年度以前は「現代国語」と「古文」「漢文」に分かれていたので、教師もそれぞれの専門性を活かし、担当を分担する場合も多かった。「古文」なり「漢文」なりに関する教材を重点的に学び、自分なりの「古典観」や見識を持ち、それを伝える授業のできる教師によって、担当さ

れていたのである。「国語総合」の導入により、まずその体制が崩れた。1年生の教育において、古典を専門的に学んだことのない国語教師も、古典を教えることになってしまったのである。「古典は苦手」と感じている教師による、古典教育の弊害が生まれる。そのまま2年生で選択される「古典A・B」は、受験用と位置づけられてしまい、受験に有利なてっとりばよい教授法が、徹底的な品詞分解と、固定的な現代語訳の暗記であり、それによって生徒の大半が古典嫌いになってしまったといえる。

このことから、これまで行われてきた文法や暗記が中心の授業は、古典嫌い・無関心の生徒を多く生み出してしまっていると考えられる。

また、平成 17 年に行われた国立教育政策研究所の調査によると、古文が好きかとの問いに対して、そうは思わないと答えた生徒は 51.2%、どちらかと言えば好きではないと答えた生徒が 21.5%であり、否定的な回答が7割を超え、漢文が好きかとの問いに、そうは思わないと答えた生徒は 50.3%、どちらかと言えば好きではないと答えた生徒が 20.9%であり、こちらも否定的な回答が7割を超えている。この調査自体は、少々古いものではあるが、古典嫌いにに関する状況があまり改善しているとは考えられず、現在も多く生徒が古典に対して否定的な捉え方をしていると考えられる。他にも、横浜国立大学が教育学部の大学1年生を対象に行った調査がある。この調査では、将来古典を教える場合に不安な点は何かという問いと、これまで受けてきた古

典の授業に対する不満は何かという二つの問いがあり、最新のデータである2018年のものを見ると、まず、将来古典を教える場合に不安な点として、作品をあまり読んでいないという点を半数以上の人が挙げており、そもそも古典が好きではないと感じている学生が3割いるということが分かる。また、これまで受けてきた古典の授業に対する不満として、高校の授業の箇所を見ると、半数以上の学生が文法・語法ばかりだったと回答している。また、4割以上の学生が暗記ばかりだった点に不満を感じていたことが分かる。これらのことをまとめると、これまでの古典の授業は、文法の習得を重視したものが多かったが、その結果、古典嫌い・無関心の生徒を多く生み出してきてしまった可能性がある。加えて、内容についても、現代語訳を暗記するようなことばかり行われてしまい、内容について生徒が主体的に読む、解釈する授業というものがあまり行われてこなかったのではないかと考えられる。そのため、文法や暗記に終始せず、もっと文章を読解する授業を行う必要があると考えた。

2. 今年度の研究について

今年度の研究について述べる前に、昨年度の研究について触れておく。昨年度は、近現代に書かれた文学作品を対象に、どのようにしたら、作品の解釈が、授業を経て変容したと感じてもらえるかということを研究した。その際には、作品の「語り手」に着目して、「なぜ語り手はこのような表現をしているのか」、「なぜ語り手はこのような表現をしているのか」という問いを考えてもらう、語りの分析を行った。昨年度の研究で扱った「語り手」については、丹藤博文氏の論を採用した。丹藤氏は、「語り手」について、以下のように述べている。

語り手とは、実体的な作者とは異なる、テキスト内で物語をすすめていく仮の主体のことである。語り手はテキスト外に実体的に存在するのではなく、あくまで機能

であり虚構化されたもの。(中略)語り手は全てを語り尽くすことはできない。ある視点を選択し(登場人物の外であったり内であったりする)、その語り手なりの価値観や方略により語るのである。それゆえ、何かを語ることは何かを語らないことであり、あるいは語ることによって別の何かを語ってしまうこともある。

「語り手」をこのようなものと設定し、その分析を行った授業は、結果として生徒が自身の初読を捉えなおしたり、そこから新たな解釈を生み出すことができていたりした。この「語り手」の分析というものを今年度の研究でも同じように活用できないかと考えた。古典作品の「語り手」については、小枘雅典氏の論がある。小枘氏は以下のように述べている。

〈語り手〉は「創り手」ではない。〈語り手〉は「創り手」とは異なる存在であり、物語内容を語る架空の人物である。したがって、〈語り手〉は「現実」に存在する人物と同様、性格や個性を有し、事象を認識する主体として存在するのである。つまり、〈語り手〉は間主観的拘束性により、「自らが生きた時代や所属した共同体の精神及び認識(イデオロギー／共同主観)」に、固有の生活背景に起因する「個性化された認識」を加味した〈語り〉で以て、物語世界を語っているのである。

昨年度の研究で扱った、丹藤氏が述べる近現代文学の「語り手」と小枘氏が述べる古典における「語り手」を比較すると、そこには共通点がみられる。それは、どちらも実体的な作者や創り手ではない仮の存在であり、その語りには「語り手」やその時代の価値観や認識が反映されるということだ。そこで私は、「語り手」の分析をすることで無意識のうちに語ってしまっている価値観や考え方を捉えることができ、そこから内容読解を行ってい

くことで文法の習得や現代語訳の暗記に留まらない授業をつくることができるのではないかと考えた。また、文章を読むと想定されている読者がどのような人なのかを考えることが「語り手」について考えることに迫るといった意見をもらうこともあった。以上のことを踏まえて、今年度の研究目的を、次のようにした。それは、高等学校古文の授業において、近現代文学の読み方を応用した読解（「語り手」に着目した読み方）を用いた授業を構築する、というものである。研究方法としては、「語り手」の分析を取り入れた授業の実践、そして、その前後にアンケートを取り分析を行う。

3. 先行研究

古典における「語り手」に注目している先行研究はあまり多くは無いのだが、その中で「語り手」の分析をしている論文として東原伸明氏の『源氏物語』「桐壺」巻頭の言説分析・再説―語り手の感情の主観的表出と敬語の使用―がある。東原氏は『源氏物語』の「桐壺」の巻の冒頭、「いずれの御時にか、女御、更衣、あまたさぶらひたまひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」の箇所について、「桐壺更衣の出自を「やむごとなき際にはあらぬ」とする判断は絶対的なものではないし、彼女の存在を「おはしけり」ではなく「ありけり」と無敬語で待遇するのは、ここを語る者の目からなされた極めて主観的な認知である」と述べている。加えて、「その前に付く「たまふ」については、同じ身分の女性には「たまふ」を付けていないが、桐壺更衣は帝の皇妃であるため、その立場を踏まえ、「語り手」が、申し訳程度に付けたものである。」と述べている。この部分を授業に活かせば、「語り手」の目線からも血筋を貶められ、桐壺更衣が病弱になってしまうという物語の展開が理解しやすくなるのではないかと考える。

4. 授業実践について

(1)授業実践の概要

- ①実習校 山梨県内の公立高等学校
- ②対象 2年理系パート22人
- ③時期 2023年10月
- ④科目 古典探究
- ⑤教材 『枕草子』『すさまじきもの』清少納言
(東京書籍 精選古典探究 古文編)
- ⑥単元名 「語り手」に着目し、文章を相対的に読むことを通して、自身の考えを持つ。
- ⑦単元の目標

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の伝統的な言語文化に対する理解を深めることができるようにする。〔知識及び技能〕
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、古典などを通じた先人のものの見方、感じ方、考え方との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。「読むこと」の〔思考力・判断力・表現力等〕
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって古典に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚を深め、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。〔学びに向かう力・人間性等〕

⑧言語活動

本文の読解を踏まえて、現代における「すさまじきもの」について考え、共有しあう。

(2)教材について

今回の授業で取り扱った『枕草子』の「すさまじきもの」は、『枕草子』を3つの章段に分けたときの類聚的章段に当てはまる。本文では、「すさまじきもの」(興ざめなもの)としていくつかのものが挙げられているが、それらは季節外れ、時季外れのもの、本来あるべきものがないもの、期待外れのものと3つ

に分けることができる。また、挙げられているものを具体的に見ていくと、「昼吠ゆる犬」や「火おこさぬ炭櫃」など生活に根差すものもあれば、「兎亡くなりたる産屋」や「除目に司得ぬ人の家」といった当人にとっては重大な問題と思われるものがまとめて「すさまじきもの」と語られている。ここには、「語り手」の主観的な価値観が表れていると私は考えた。特に官職につくことができなかつた人やその周囲の人々にとっては重大な問題を、興ざめなものと語ることができるのは「語り手」が無意識に抱えている宮中にある位の高い人の価値観が反映されているからではないかと考えられる。また、「験者」の声について「蟬の声」という表現を使っている箇所にも「語り手」の考えが表れている。「験者」の声に「蟬の声」という表現を用いるところには、験者に対しての何らかの嫌悪感が込められているのではないかと考えた。また、「蟬の声」という表現をすることで、その後「物の怪調ず」ということが失敗することに対しての期待外れ感がより強まっているとも読むことができそうである。生徒にはこれらのことを考えてもらった。

(3)各時間の目標と活動

単元は全4時間であり、「語り手」に注目したのは後半2時間である。本研究の研究目的に関係してくるのが後半の2時間であるため、今回はその2時間についてのみ述べる。

① 3時間目

目標：「語り手」というものが何かを捉え、語りを踏まえた読み方を経験する。

この時間から本格的に「語り手」を踏まえた読みというものをを行った。ただ、その前に「語り手」というものについて、教室全体で共通理解を図っておく必要があったため、その確認を行った。生徒たちは、昨年度に『羅生門』を学習していたため、それを例に一度近現代文学における「語り手」というものを確認した。そこでは、作者と「語り手」は別の存在であること、また、文章には「語り手」

が無意識に語ってしまっているものがあるということを中心にした。そして、それを踏まえ、今回の授業で扱う『枕草子』の「語り手」についての確認を行った。『枕草子』は随筆文であるため、近現代の小説のように作者と「語り手」をはっきりと区別することは難しいが、それでも、やはり、作者である清少納言が無意識のうちに語ってしまっているものがあるため、それを分析することで、より深く読むことができるということを伝えた。そして、その後に「語り」の分析を行った。ここでは、図1のワークシートを使って、「験者」の声が「蟬の声しぼり出だして」と表現されていることでどのような印象を持つかという問いと、なぜこのような表現がなされているのかという2つの問いを考えてもらった。

図1 3時間目使用ワークシート

	●なぜこのような表現がなされているのか、考えてみよう。		●験者の声について「蟬の声しぼり出だして」と語られていることとどのような印象を持つか、書いてみよう。
--	-----------------------------	--	--

生徒から出た意見として、まず、一つ目の問いについては、験者の声が蟬のようにうるさいというマイナスの印象と、逆に大きな声でやる気を感じるというプラスの印象の2つが主に出てきた。「蟬の声」というものを悪く捉えている生徒と良く捉えている生徒で大体半々くらいとなった。一方、なぜこのような表現がなされているのだろうかという問いに対しては、本文に出てきた験者の「したり顔」を強調しているという趣旨のものや、験者の期待外れ感をより強めるためといった回答が出てきた。この表現がなされている意図に関しては、多くの生徒が験者に対してマイナスの作用が働いていると捉えていた。

② 4時間目

目標：語り手（清少納言）の見方・考え方による「すさまじ」を捉え、もう一度、現代のすさまじきものを考える。

この時間には、まず、本文に「すさまじきもの」として出てくる10のもの（昼吠ゆる犬～除目に司得ぬ人の家）を3つのグループに分けてもらい、「すさまじ」に込められた意味の違いについて考えてもらう活動を行った。その後、2つ目の「語り」の分析に関する問いとして、「児亡くなりたる産屋」や「火おこさぬ炭櫃。地火炉」と「験者の、物の怪調ず」することの失敗や「除目に司得ぬ人の家」をまとめて「すさまじ」と語る「語り手」はどのような目線で語っているのかということを図2のワークシートを使い考えてもらった。また、この問いが難しいという生徒には、この文章を読むと想定されている読者はどのような人だろうかという問いについて考えてもらった。

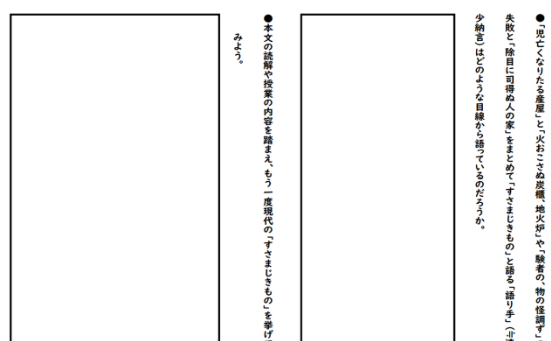


図2 4時間目使用ワークシート

この問いの関しては、少々生徒には難しいところもあったが、生徒からは身分が高そうという回答や上からの目線な感じがするといった趣旨の回答が出てきた。また、想定されている読者についても、同じように身分や位が高そうだという回答が出てきた。問いを考えてもらう際には適宜周囲の人との交流を挟んでいたが、そこでは活発に話し合いがなされており、難しい問いではありつつも生徒にとって新鮮な活動であることが見て取れた。

5. 授業実践とアンケートの分析

事前アンケートと授業後に行った事後アン

ケートを分析し、古典や古典の授業に対するイメージの変容と近現代文学の読み方を応用した今回の授業についてどのように感じたかを見とる。

(1)事前アンケートの分析

まず、「古典作品を読むことは好きですか。」という問いを行い、「好き・どちらかと言えば好き・どちらかと言えば嫌い・嫌い」の四択で回答してもらった。結果は以下のグラフの通りである。(図3)

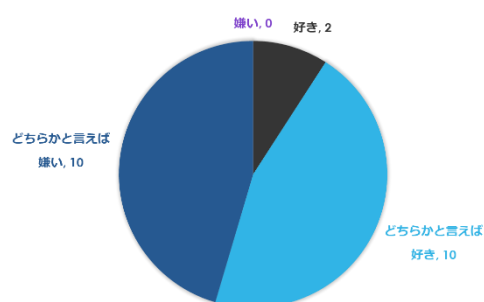


図3 アンケートの結果

結果は、好きやどちらかと言えば好きと回答した生徒が半数以上であり、最初に述べた国立教育政策研究所の調査とは異なるデータとなった。これに関しては想像以上に古典作品に対して好印象を持っている生徒が多く、意外な結果であった。

次に、「古典は得意ですか。」という問いを行い、「得意・どちらかと言えば得意・どちらかと言えば不得意・不得意」の四択で回答してもらった。回答の結果は以下のグラフの通りである。(図4)

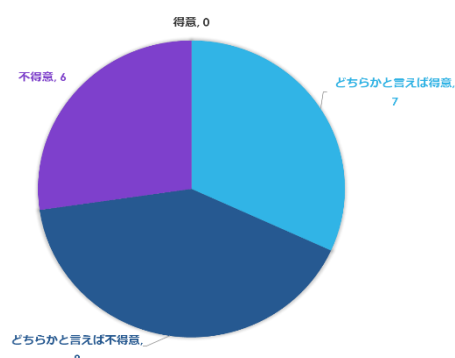


図4 アンケートの結果

アンケートの結果、不得意・どちらかと言えば不得意と回答した生徒が7割を超えることとなった。このクラスはテストの結果でパート分けした中で一番上のパートであるが、それでも苦手意識を持っている生徒はやはり少なくないということが分かる。また、2つのアンケート結果を合わせて分析してみると、最初の「古典作品を読むことは好きですか」という問いで、好きだと回答している2名が、その後の「古典は得意ですか。」という問いで、どちらかと言えば不得意と回答していた。また、他にも最初の問いでどちらかと言えば好きと回答していた4人の生徒はその後の問いで不得意と回答しており、古典作品自体の好悪と科目としての得手不得手は必ずしも一致するわけではないということが分かった。このことから、古典作品自体に対しての嫌悪感というものはそこまでなく、もっと文章を読解する活動をするのを望んでいるのではないかと考えた。

3つ目の問いとして、「古典の授業に対してどのようなイメージを持っていますか。」というものを設定し、自由記述で回答してもらった。そして、その回答をテキストマイニングで分析したものが以下の図である。(図5)

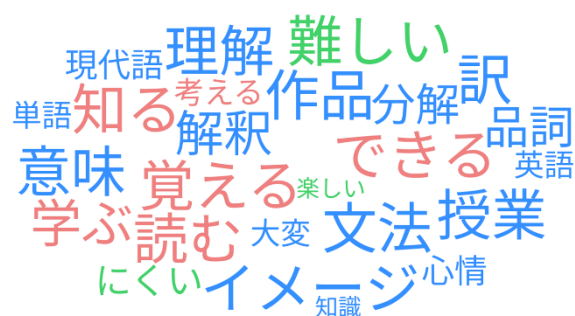


図5 古典の授業に対するイメージの回答

生徒の回答に多く出てきていた言葉として「文法」「覚える」「難しい」といったものがある。やはり文法や単語の暗記が多く難しい(嫌い)といった趣旨のものが多かった。文法の習得や暗記の多さが古典の授業に対するマイナスイメージとなっていることは否定のしようがない。一方で、そこまで多くはないが、古典の作品を読むことが楽しい、面白い

ということを記述している生徒も数人いた。このことから、先述したように、生徒はもっと文章を読解することを望んでいるのではないかということが考えられる。以下に特徴的な生徒の回答を示す。

- ・現代文と違って文法や単語も覚えなくてはならないから、なかなか読む気になれない。
- ・物語を読むことはとても面白く、昔の時代の出来事・書物などを学ぶことは好きだが、文法などの語法は正直あまり好きではない。文法が面倒くさいイメージ。

最後に、「文学作品の「語り手」について知っていますか。また、どんな役割があると思いますか。」ということを自由記述で回答してもらった。結果として、「語り手」を知っている、そして役割として正しいことを記述している生徒は8人だけであった。また、語り部と勘違いしている生徒が8人おり、「語り手」というものの自体がそれまでの授業の中で、あまり触れられていないということが分かった。

(2)事後アンケートの分析

まず、「今回の授業で古典(の授業)に対するイメージは変わりましたか。理由を含めて簡単に教えてください。」という問いに自由記述で回答してもらった。古典やその授業に対するイメージが変わったと答えた生徒が18人、変わらなかったと答えた生徒が4人であった。記述の内容としては、まず、普段の授業とは異なる視点で面白かったといった内容のものが多くあり、イメージが変わらなかったと回答していた4人もこれと同じ趣旨のことを記述していた。また1つの言葉の意味を理解するだけで作品に対する印象が大きく変わったという記述をしている生徒もいた。以下に特徴的な生徒の回答を示す。

- ・古典といったら訳や歴史的背景、文法のみだと思っていたが、語り手という新しい視点から授業が行われて今までとは違

うイメージになった。

- ・今までは、意味や訳をメインで勉強していて覚えることがいっぱいだなと思ってなかったけど、古典って深いんだなと思いました。1つの言葉の意味の理解だけでも作品に対する感じ方が変わったような気がしたからです。

次に、「語り手」に着目して読むといった文学的文章の読み方を応用して『枕草子』を読むことについてどう感じましたか。」という問いに自由記述で回答してもらった。その結果、肯定的な記述をしていた生徒が18人、疑問を書いていた生徒が3人、難しかったと回答していた生徒が1人であった。また、生徒の中には、紀貫之が書いた「土佐日記」のことに言及したうえで、文章を上から読んでいような気分になったと回答している人もいた。疑問としては、やはり「語り手」と作者の違いが分からないというものが出てきた。以下に特徴的な生徒の回答を示す。

- ・紀貫之が女性のふりをして書いた作品のことを思い出しました。語り手の意図まで考えると、物語をさらに上から見ていような印象で、物語の印象が変わったり、鮮明になったりすると思いました。
- ・特に随筆は書いている人の無意識に思っていることが常識として書かれたりする部分もあるから「語り手」に注目することでより、この文は何を言いたいのか、表しているのかというところの理解が深まったと思います。

6. 成果と課題、今後の展望

まず、本研究での成果を3つ挙げる。1つ目の成果は、「語り手」に着目することで文法や現代語訳の暗記に留まらない授業を構築できたことである。これは研究目的でもあったので、ひとまず1つの授業として構築することができたことは成果と言ってよいだろう。2つ目は、今回行った「語り手」に着目した読み

を取り入れた授業が、おおむね生徒には肯定的に受け止められたことだ。そして、3つ目が、文章を相対的に読むことや、内容を深いところまで読むことができたという意見が出てきたり、他の作品と結び付けて考えることができていたりした点だ。

課題としては、まず、作者と「語り手」の違いというところを完全に理解してもらえなかった点が挙げられる。やはり随筆文だと作者＝「語り手」という感覚をめぐり切ることが難しく、そこが疑問点として生徒のほうから挙がってしまった。これに関しては、物語文の教材や生徒の感想にも出てきた「土佐日記」を活用すればもう少し分かりやすくなるを考える。また、もう一つの課題として普通の授業よりも難易度が上がってしまったことが挙げられる。古典についての知識が比較のある生徒でも難しいと感じてしまっているため、どの学校でも実践可能とはいえないと感じている。これについては、生徒の状況に合わせて現代語訳をどこまで丁寧に行うかを変えたり、「語り」の分析に関する問いも1つに絞ったりするなどの工夫が必要であると考えている。

今後の展望としては、本研究で行った「語り手」に着目した授業が、古典と現代文をつなげる授業にならないかと考えている。現在高等学校1年生が学んでいる「言語文化」の授業では、近現代の文学的文章と古典が同じ科目で取り扱われているため、近現代文学と古典のつながりを感じてもらいやすいと言える。この2つを「語り手」に着目して読むという共通した読み方を行うことで、古典の作品と近現代の作品は関連のある日本の言語文化であるということを意識してもらえるかもしれない。そういった授業の1つの形にできるよう今後も検討していきたい。

7. おわりに

今年度の研究で初めて古典教材の研究を行ったが、これまで行ってきた近現代の文学的文章の研究を活かすことができたことは私に

とってとても大きな成果であった。一方で、古典の授業をするにあたっては、自分の経験の乏しさを痛感することが多々あった。来年度から現場に出ることとなるが、これまでの経験、そして今年度の研究を活かして、生徒が文章を主体的に読み、時にはその解釈に変容が起こるような授業を構想していきたい。

【参考・引用文献】

- ・ AI テキストマイニング
<https://textmining.userlocal.jp/>
- ・ 東原伸明 「『源氏物語』「桐壺」巻頭の言説分析・再説ー語り手の感情の主観的表出と敬語の使用ー」（高知女子大学文化学部『高知女子大学文化論叢』第3号、p146～152、2001）
- ・ 国立教育政策研究所「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」（2007・4）
- ・ 日本学術会議 言語・文学委員会 古典文化と言語分科会「提言 高校国語教育の改善に向けて」（2020・6）
- ・ 小枘雅典 「〈語りの構造〉を踏まえた〈読み〉ー古文の授業構築のためにー」（広島大学教育学部光葉会『国語教育研究』第41号、p43～57、1998・3）
- ・ 丹藤博文 『ナラティブ・リテラシーー読書行為としての語りー』（溪水社、2018・4）

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた実習校の校長先生、国語科担当の先生をはじめ先生方や生徒の皆さんに厚く御礼申し上げます。